

---

# 人間発達科学 I

## 第4回

---

〈子ども〉の発見①

---

## (1) アリエス・ショック

### ①「新しい歴史学」

- アナール学派 (école des Annales)
  - Philippe Ariés (1914-84)  
『〈子供〉の誕生』(1960、翻訳1980)
  - 対象
    - ・普通の人々が共通に経験する具体的な人生の諸断面。  
Mentalité=心性
  - 方法的特徴
    - ・長期的な時間幅による時代区分
    - ・史料として絵画を使用
-

## ②〈子ども〉不在の中世

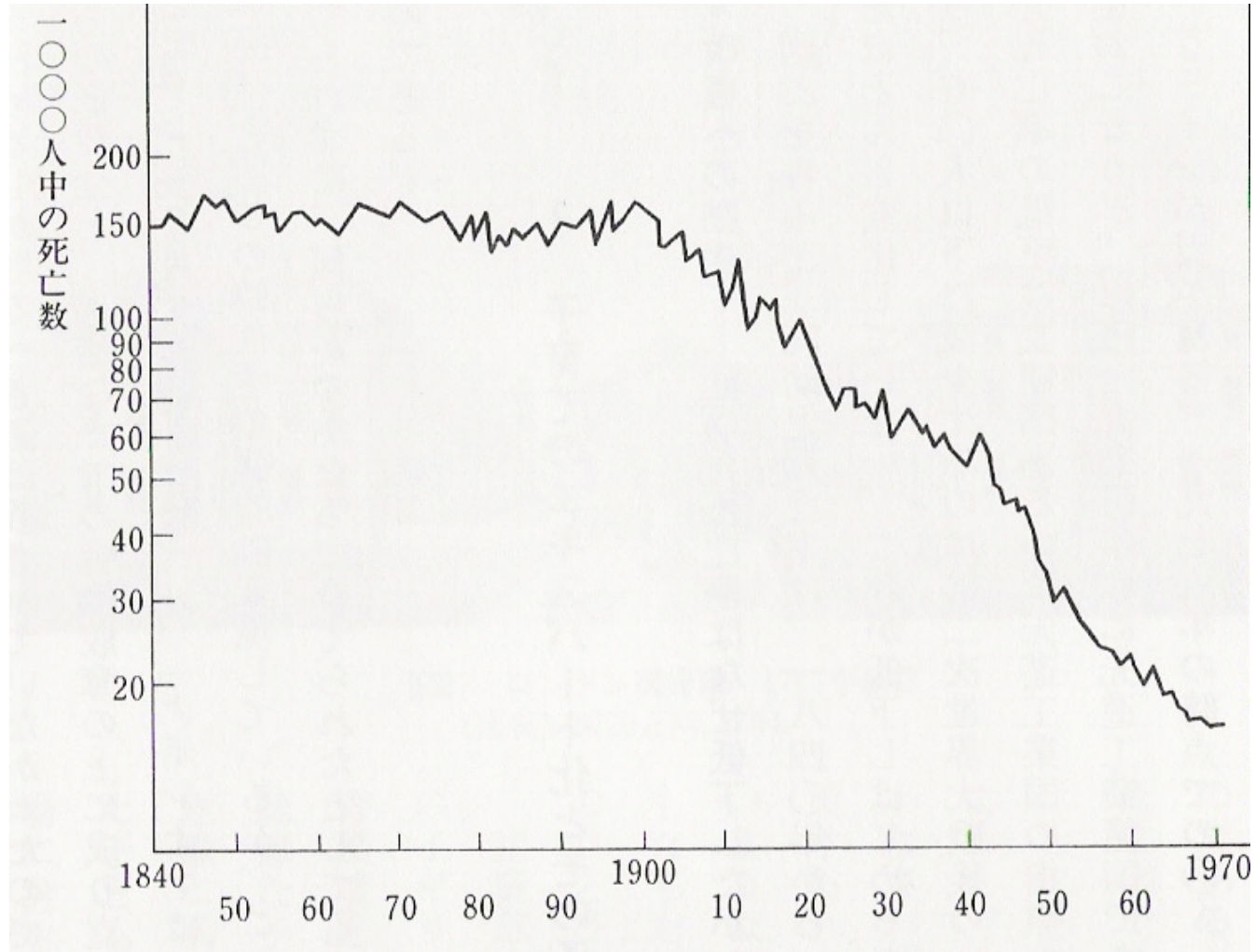
- 12世紀まで子どもは描かれず
- 13世紀ごろから「幼子イエス」「天使」が描かれるが・・・

## •高い乳児死亡率

### 貴族階級の子どもの死亡率(1000人当たり)

時期(年)	新生児死亡率	胎児死亡率	乳幼児死亡率
1500~99	89	100	104
1600~99	75	105	171
1700~99	47	75	106
1800~99	23	42	45
1900~35	5	8	3

(北本、1993年より)



イギリスにおける乳幼児死亡率の変化  
(北本、1993年より)

### ③子どもへのまなざしの誕生

- 「かわいがり」の感情
  - ・16, 17世紀上層社会の家族で。
  - ・大人と区別される子ども
  - ・家族の中心におかれる子ども
- 道徳的・厳格さを求める感情
  - ・教会のモラリスト、教育家
    - 「かわいがり」の否定
    - ⇒子どもへの注目の進行

---

家族の肖像に描かれる子ども(1635年)  
(シヨルシュ、1992年)



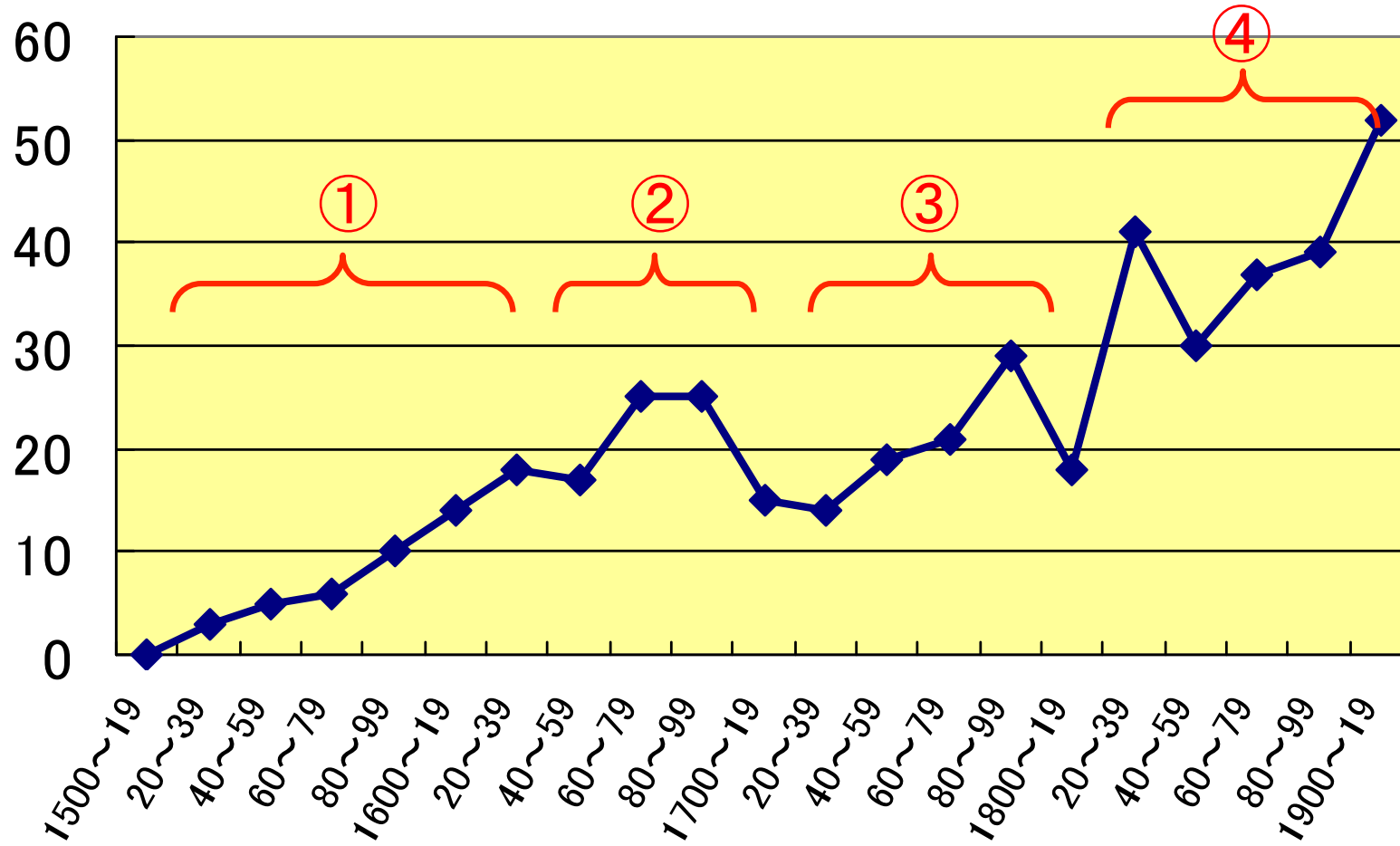
---

家族の肖像に描かれる子ども(1742年)  
(北本、1993年)





## イギリスにおける『子育て書』の出版点数 (北本、1993年より)



---

- 子育て書の刊行動向にみる子どもへの注目

第1期:1540年代～1620年代

- ・1580年代までラテン語翻訳が多い
- ・1580年代以降イギリス人による模倣・対抗書出現
- ・道徳的傾向が強い

第2期:1660年代～1690年代

- ・科学革命との結びつき→一定の合理性

第3期:1730年代～1780年代

- ・生物学的・医学的まなざしの誕生
- ・おもちゃ産業の誕生

第4期:1810年代～1840年代

- ・子どもの発育に対する関心の高まり。
  - ・母親向けが増加
-

## (2)『エミール』=「子どもの発見の書」か？

### ①ルソーについて

1712年 ジュネーブ生まれ。父は時計職人

1728年 閉門に遅れ、フランス、イタリアの放浪へ

1742年 パリに出る。

1745年 テレーズと内縁関係に。

55年までに5人の子どもを捨てる。

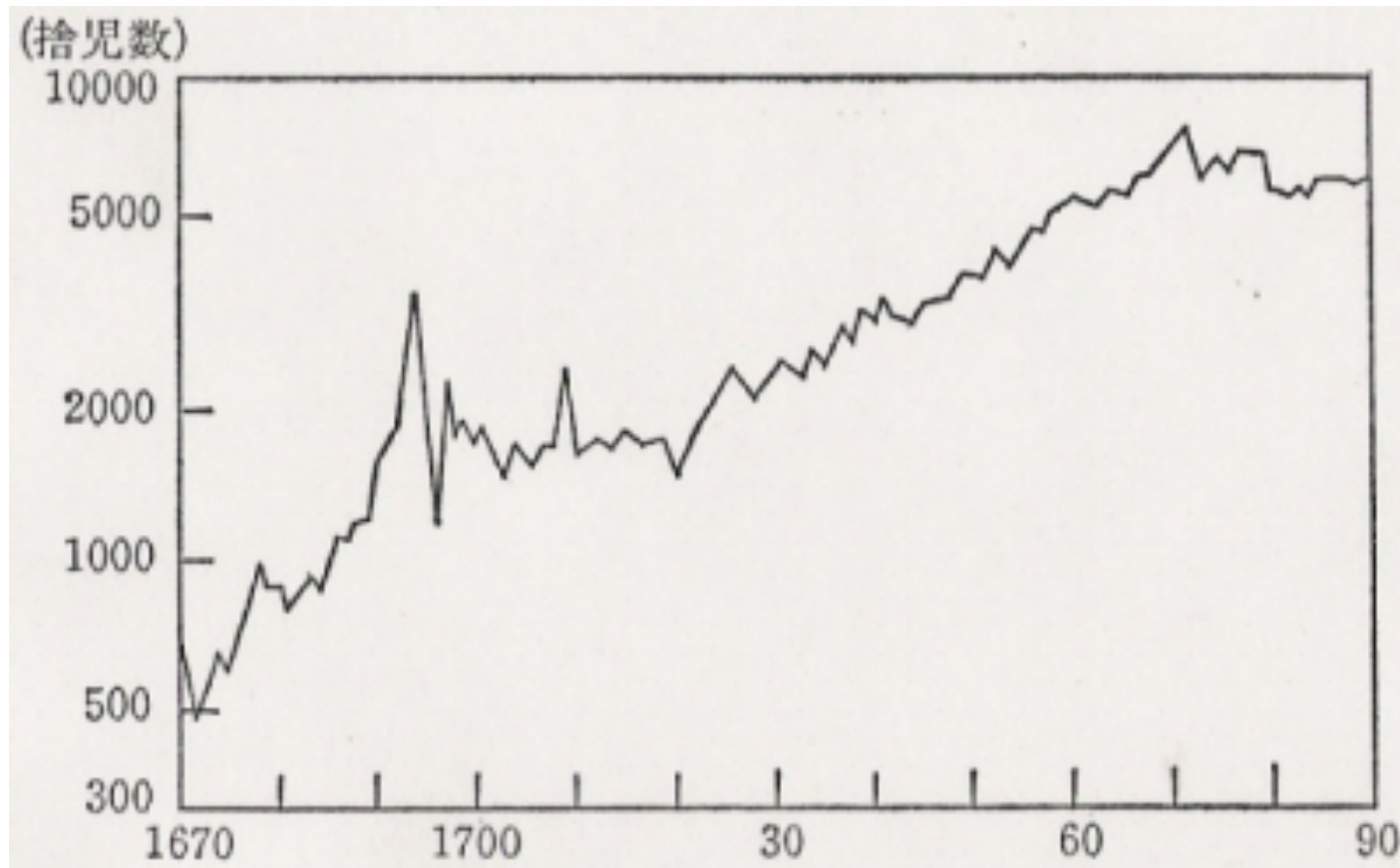
1750年 『学問芸術論』が懸賞論文に当選

1755年 『人間不平等起源論』出版

1762年 『社会契約論』『エミール』出版。『エミール』が焚書の対象とされ逮捕令が出たためスイスに逃亡。

1778年 死去

## パリの捨子養育院の捨子受入数(二宮、1986年)



## パリの捨て子養育院と回転箱



(江藤ほか編、1992年より)

## ②「子どもの発見の書」としての『エミール』

- 子ども期固有の意味を重視
  - 子どもは大人への準備段階ではないと主張
- 「人間の原罪」を否定→「自然の教育」
  - 「万物をつくる者の手を離れるときはすべてよいものであるが、人間の手に移るとすべてが悪くなる。」
- 発達段階への着目
  - ・子ども期
    - ・0～1歳・・・ことば以前の感覚器官の時期
    - ・1～12歳・・・自然と事物の掟を知る時期
    - ・12～15歳・・・力が欲望を上回って発達する、  
理性の目覚めの時期
  - ・青年期
  - ・成人期

---

- 消極教育論＝「自然の教育」

- ・「自然を観察するがいい。そして自然が示してくれる道を行くがいい。」
- ・「自然の法則にさからうな。」
- ・「自然の発育に応じて教育せよ。」
- ・「子どもは教師の弟子ではない。自然の弟子だ。」

⇒人間は「善性」をもち、それを引き出すために教育は消極的でなければならない、と主張

---

### ③読み直される『エミール』

#### ■ 障がい者への差別意識

「身体が魂の教育の妨げになっているような子ども、要するに自分のためにも他人のためにも結局なんの役にも立たないような子ども・・・こんな子どものために無駄骨を折ったところで何になろう。社会の損失を二倍にし、一人ですむのに二人の人間を社会から奪うことになるだけではないだろうか？」

(『エミール』第1編、安川ほか1987年)



---

- 「自然の教育」？

「かれをかれ自身からまもってやるのはあなたがたの仕事だ。昼も夜も一人にさせておいてはいけない。少なくともかれと同じ部屋に寝るがいい。ねむくてやりきれなくなるまでは床につかせないように。そして、目が覚めたらすぐに床をはなれさせるように。・・・ひとたびかれがそういう危険なおぎないを知ることになったら、もうだめだ。その後かれはいつまでも虚弱な体と心をもつことになる。・・・本能を失わせてはならないが、それを規制しなければならない。」(第4編)

---

• 女性への差別意識

「女の教育法は・・・男の教育法と反対でなければならない」

男（エミール）

- 「服従する」「命令する」という語は子どもの辞書から除外・・・
- 宗教の話をしなない・・・
- どんな習慣にもなじまないという習慣を・・・
- 不正に反発・・・
- 自由であること・・・

女（ソフィー）

- 命令するがよい・・・服従することは自然・・・
- 早くから宗教の話を・・・
- 不平を言わないような習慣を・・・
- 夫の不正をさえ耐え忍び・・・
- 自由をもってはならない・・・